

木田市長の



vol.54

世界の中の日本

反捕鯨団体シー・シエパードの元船長が、調査捕鯨に反対して、無断で船に進入し、逮捕される事件が発生しました。彼らのねらいは、世界中の関心をこの問題に引きつけ、反捕鯨の世論を形成しようとしていくことは、間違いがありません。「目的のためには手段を選ばず」という行動は、本来、許されるはずがありません。

一方、和歌山県太地町のイルカ漁を隠し撮りした「ザ・コーヴ」が、アカデミー賞の長編ドキュメンタリー賞を受賞しました。漁の関係者は、「許可もなく隠し撮りした映画が、権威ある賞を受賞するなど信じられない」と憤っています。これも、「目的のためには手段を選ばず」ということとでは、さらに、ワシントン条約締結のクロマグロが取り引き禁止になるかもしれないというニュースもありました。日本人の大好きなクロマグロが、ますます庶民の口に入りにくくなるのではないかと心配もしました。

「クジラやイルカを殺すのはかわいそうで、なぜ牛や豚を殺すのはかわいそうではないのか」、「非合法的な活動は、もっと非難されるべきだ」というような意見は、日本中に多くあると思っています。しかし、世界のすう勢は、日本人が考えていることとは違ってきているようにも見えます。



過去には、牛肉・オレンジ・米など農産物の自由化問題がありました。食糧の安全保障や自給率の維持など、正当な理由があっても、世界との良好な関係や、工業製品の輸出促進など、より大きな波に飲み込まれる形で自由化が決まってきました。

クジラやイルカ、クロマグロについても、わたしたち日本人にとつては「正当な主張である」と思われても、世界で認められなくなれば、また、大きな波に飲み込まれることになるかもしれません。

日本人の中には、クジラやイルカも大事であるが、世界の国々と仲良くすることの方が、より大切であるという考え方が増えてくる可能性もあります。

日本が孤立したり、日本人が残酷な人種であると思われるたくないと考える人も多くなっているかもしれません。

今後、日本がどのような選択をしていくのか、非常に興味のあるところです。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.93

生活しやすい環境をつくる

リンゴの無農薬・無肥料栽培で有名な木村秋則さんが、著書「リンゴが教えてくれたこと」の中で、「私の体に米一粒、リンゴ一個も実らせることはできません。私たちはただリンゴの木やイネが生活しやすい環境をつくっているだけ、ということをお忘れはいけません。」と言っています。

さらに、「私は今でもリンゴの木との対話を続けています。とりわけ収穫時には今年のお礼と来年のお願いをします。手で触れながら木に自分の温もりを気持ちとして伝えています。／人間は人間だけでは生きられません。どんなに科学が進んでも人間は自然から離れて生きていけません。／人間そのものが自然の産物であって、人間は自然のお手伝いをしていくに過ぎません。／田んぼに行けば畦畔が壊れているなど気が付きます。行かないと分かりません。農家の人はそういうことを忘れていません。それほど土から離れたしまった。／肥料、農薬、機械が大事じゃない。主と従をはき違えてしまっているのです。私は、沼や川周辺の土をよく観察し、それを自分の田んぼに取り入れてくださいます。イネと会話のできるプロになっています。」とも言っています。

“人権文化の花を咲かせる”ためには、わたしたち一人ひとりが、地球上のすべての人たちのみならず、森羅万象すべてのものが生活しやすい環境をつくるのが大切だと思います。

一人ひとりができる“土づくり”を実践していくことが大切だと思います。